

## キャリバンは、本当に解放されたのか — ラミングによる、失われた西インド民衆史構築の試み —

北原 靖明

### 論文要旨

一九二七年バルバドス生まれのラミングは、トリニダード出身のセルボンやナイポールらと並んで脱植民地時代の西インドを代表する作家のひとりであるが、日本では訳書もなく殆ど知られていない。彼は、西欧による西インド植民地を表象するものとしてシェクスピアの戯曲『テムベスト』をしばしば引用する。この作品に登場するプロスペロー／キャリバンの関係こそ、植民者／植民地被支配者の関係を示唆していると考えるのである。

いっぽう、西インドの脱植民地化の比喻としてラミングが採り上げるのが、ハイチに残る「魂の儀式」である。水底に閉じ込められた死者の魂を解放するこの儀式が、西インドの脱植民地運動に対比される。本論は、『テムベスト』主題と「魂の儀式」をキーワードとして、①ヨーロッパアフリカー西インドの三角貿易を結び付けた、いわゆる「中間航路」の光と影、および②ラミングの植民地脱植民地に関する歴史認識を解析し、ラミング文学の本質に迫ることを企図している。キーワード【ラミング、テムベスト（プロスペロー／キャリバン）、魂の儀式、中間航路、脱植民地】

### はじめに

ラミング (George Lammin) は、一九二七年旧英領西インド、バルバドスのアフリカ系小学校教師の家庭に生まれている。地元のグラーマー・スクールを卒業後、一九四六年から四年間トリニダード・トバゴ（以下、「トリニダード」）で教師を勤めた。一九五〇年英国に移住し、一九五三年に発表した『わが皮膚の城の内に』(In the Castle of My Skin)<sup>(1)</sup>により一躍英米で知られるようになった。現在では、トリニダード出身のセルボン (Samuel Selvon) やナイポール (Vida S. Napaul) らとともに、ポスト・コロニアル時代の西インド（カリブ地域）を代表する作家の一人とされている。ラミングには、欧米の植民地支配とその負の遺産を告発する政治性の強い作品が多い。彼自身、西インド出身の作家の役割は、植民地支配者側に

より書かれた西インド史を見直し、地域民衆を正当な位置に復元することであると述べている。

ラミングによれば、①コロンブスの新大陸到達、②奴隷制の導入、そして③西インド人による著作活動が、カリブ史上の三大事件とい<sup>(2)</sup>う。著述家の立場を強調しているのは、自分たちの仕事のほうが長期的には、政治家の活動よりも独立後の社会と民衆の意識に影響が大きいと自負しているからである。ここに民衆とは、主にサトウキビ農園で過酷な労働を強いられたアフリカ系奴隷やインド系年季労働者、およびその子孫である「零細農民」(peasant)を意味する<sup>(3)</sup>。

彼の西インドは、地域概念であると同時に、西欧列強の旧植民地を表象していた。植民地西インドの文化の基本は民衆の労働に依存してきたにもかかわらず、彼らは公式の記録からほとんど無視されてきた。西インドの歴史や文学は、この民衆の社会を描かなければならない<sup>(4)</sup>。

カリブ地域のアフリカ系住民にとって、アフリカのイメージを想起させる宗教や音楽は、常に想像力を刺激するものらしい。しかし、彼らの初代住民がアフリカ各地で育てていた文化や宗教や慣習は、強制移住と奴隷労働のなかで植民者のものに融合されたり、分散し断片化され、ほとんど消滅してしまった。わずかに痕跡をとどめるアフリカの要素、すなわちドラムのリズムや宗教的儀式などが、アフリカ系の人々のアイデンティティのよすがとなる。たとえば、西アフリカのヨルバ族の宗教オリッシュヤがある。彼らの雷神シャング

は聖ジョンに、軍神オグンは聖人ミカエルへと、夫々混交して西インドに残った<sup>(5)</sup>。ラミングがしばしば引き合いに出すのは、ハイチに残る「魂の儀式」(the ceremony of the souls)である。

たとえば、『流浪の楽しみ』の中でラミングは、儀式について次のように言及する。

――ハイチの農民は、この儀式を神聖な霊的交渉と看做している。それは、煉獄である水底に閉じ込められた死者が、僧侶を介して遺族に過去の罪、罪のあがない、恨みや復讐心、欲望、夢などを告白し、あるいは未来への期待を語りかけるのである。儀式は、地下の東屋トネル(Tonnelles (F))の中で密かにおこなわれる。儀式の大筋は、規定されている。ただ細部のヴァリエーションの違いにより、死者の運命が決まるのである。生存者の理解を得ることに成功した死者だけが、煉獄から解放され永遠の世界に入る<sup>(6)</sup>。

ハイチ民衆のあいだではこの秘儀は、場合によっては法律を超えた効力を持つているという。一九五六年ラミングは、六年間の英国滞在をいったん切り上げて西インドに戻ったおりに、ハイチでこの儀式を目撃したのである。「魂の儀式」を通じてラミングは、なにを提起しようとしているのか。水底に閉じ込められた死者とは何か。煉獄からの脱出とはどういうことか。

「魂の儀式」に続いて、『流浪の楽しみ』の中でラミングが触れているのは、シエクスピア最後の戯曲『テムペスト』(一六一一)で

(7) ある。この作品の主人公、ミラノ公国の正統な後継者プロスペローは、後に「中間航路」と呼ばれる海原を越え、カリブ地域と推定される島に漂着し、その岩屋で絶対的な権力を振るっている。彼は、魔女により木の幹に閉じ込められていたエリエル（空気の精）を救出し、これを従順な僕にした。同時に、エリエルのマジック力も我が物にしたのである。彼の権力の源泉は、エリエルの魔法である。これを利用してプロスペローは、沖を行く船を難破させたり、漂着者を庇護のもとに置くことができた。島の粗野な住民キャリバンも、プロスペローには逆らえない。エリエルもキャリバンも、彼の権力に絡めとられたのである。本来の島の住民であるキャリバンが、なにゆえによそ者であるプロスペローに絶対的隷属を強いられるのか。どうすればキャリバンは、もとの自由な身分をとり戻せるのか。

魔法的な呪縛とそこからの解放という点で「魂の儀式」は、『テムベスト』の主題を補う。少なくとも、苦役労働に縛られた西インド人の末裔であるラミングは、そのように連想したのである。プロスペローのマジックこそ、過去の民衆の魂を水底に閉じ込め、白人支配の植民地主義を創生したものであると。ラミングによる『テムベスト』主題については、既にナイール (Supriya Nair) やジョセフ (Margaret P. Joseph) (8) が西欧による植民地支配を象徴していると論じている。しかし、民衆の隷属感覚の払拭と自立意識の確立を促すラミング文学の企図にとつては、「魂の儀式」も同様に重要で

あり、彼の歴史意識や視点の理解に役立つと思われる。

本論は、「魂の儀式」と「プロスペロー／キャリバン関係」の二つをキーワードとして、主としてラミングのテキストを辿りつつ、

- (1) ヨーロッパアフリカ西インドを三角貿易で連結し、あるいは奴隷を出生地から隔離した「中間航路」の光と影
- (2) 近現代における「中間航路」の意味
- (3) ラミングのコロナルおよびポスト・コロナル認識

を解析し、ラミング文学の本質を探ることを意図している。

### 一、すべては、新大陸に向かう「中間航路」から始まった

コロンブスの新大陸到達に続く一六世紀は、「航海の時代」と呼ばれている。まずカリブ地域に進出したのはスペインであり、ついでフランスが続いた。英国は少し遅れてようやくエリザベス一世の時代に、ホーキンス、ドレーク、ローリーらの冒険者たちが西インドにやってきた。彼らが当初求めたのは黄金であり、土地や労働力ではなかった。以前からの住民に対しては、恐怖感や敵意あるいは無視以上の関心を払うこともなかった。正確な情報が限られたなかで、温和なアラワク人、人食い人種の凶暴なカリブ人という原住民のステレオ・タイプ化されたイメージだけが、専ら西欧世界に伝えられた。(9) もっともアラワクやカリブは、白人が新大陸に持ち込んだ伝染病のため入植の初期にほとんど絶滅していたのだが。

原住民に言及した文献の中で特に知られているのは、一五八〇年

前後にフランス人モンテーニュ (Michel de Montaigne) が書いた『随想録』第二章のエッセイ「人喰人 (キャンニバル) について」<sup>(11)</sup> であろう。モンテーニュは、一般に流布されている新世界の住民についての固定概念を、アメリカ帰りの人物との面談や読書で得られた洞察に基づき覆そうとした。すなわち、自分たちの習慣や常識以外を野蛮とするヨーロッパ人の心性そのものを、批判したのである。むしろ未開とされる住民の素朴さや高貴な美德を見つけようと試みたのだった。この「高貴な野蛮人」論は、その後モンテーニュの意図に反して、植民者やキリスト教宣教師による未開人教化の口実<sup>(12)</sup> 利用されることになる。

ともあれ、『随想録』はシェクスピアの友人により一六〇三年に英訳され、その写しがシェクスピアの手元に残っている。「人喰人」の一部が、『テムペスト』にそっくり引用されているところから、シェクスピアがこのエッセイに目を通していたことは間違いない<sup>(13)</sup>。キャリバンは、人喰いとされたカリブ人のアナグラムだった。しかし、シェクスピアは、状況設定に『随想録』の一節を借りたに過ぎない。粗暴な蛮性を持つとされるカリブ人という通念は、そっくりキャリバンに転用された。

バーミューダー諸島での英国船難破の報告書も、『テムペスト』執筆に利用された。戯曲の中に、バーミューダーへの言及も見られるのである。『テムペスト』の島の所在を西インドに推定する傍証<sup>(14)</sup> になろう。

一六世紀の旅行記としてもつとも膨大でよく知られたものに英国人ハクルート (Richard Hakluyt) が収集した記録がある<sup>(15)</sup>。この記録には、航行、商取引、書状、特許状、公式文書など雑多な文書からなり、対象範囲もロシア、中近東、アジア、アフリカ、南北アメリカにわたっている。特に一五九八年から一六〇〇年の記録は、ホーキンス、ドレーク、ローリー等の西インドへの航海の記述が中心になった。一五八八年スペインの無敵艦隊を破ったエリザベス一世の英国が、短期間に制海権を拡大させ国際交易を新大陸に拡張していく状況を裏書しているのである。

西インドに向かう商船の積荷の中には、アフリカの西岸ギネアで集めた奴隷が含まれるようになった。英国が、新大陸で交易にとどまらず植民地化を推進するにつれ、奴隷の需要は増大する。やがて奴隷労働力の差が、先に西インドに進出したスペインとの農場経営で英国が優位に立つ要因のひとつになった。スペイン植民地では在地地主が多く、彼らが直接、主に白人や混血の労働力を使い農場を経営していた。奴隷の供給源である西アフリカに、スペインは領土を持たなかつた。いつぼう、西インドでの英国のサトウキビ農園では不在地主が多く、経営は現地の管理者に任されていた。現地の管理者は、安価な奴隷の労働力で経営を合理化したのである。西インドのスペイン植民地での奴隷使用率はおよそ五〇%に対し、英領植民地の奴隷労働依存率は九〇%前後ときわめて高かつた<sup>(16)</sup>。

ちなみに、ハクルートの航海記録より約一〇〇年あとの一七一七

年に書かれたデフォアの『ロビンソン・クルーソー』は、西インドのトバゴに比定される孤島の岩屋に住居するクルーソーが、人喰い人種の手を逃れてきた黒人少年フライデーを保護し絶対服従の従僕にする点で、『テムペスト』の構成に類似している。クルーソー自身は、かつて奴隷貿易に関わった船乗とされている。

シエクスピアは、『テムペスト』では直接黒人奴隷を登場させなかったが、事実上キャリバンはプロスペローの奴隷だった。キャリバンは、プロスペローをいつも呪っているが、表立って刃向えない。料理人ステファノに、反乱を絶えず唆すだけである。しかし、二人は戯曲では端役の道化に過ぎない。本筋は、エーリエルの魔術で難破し、この島に漂着したミラノ公国の篡奪者アントーニオ、これに共謀したナポリ王アラランゾーとその王子ファードイナンドらへの報復である。結局ファードイナンドとプロスペローの娘ミランダが恋仲になったため、プロスペローは過去の恨みを清算して一行と和解した。かくてプロスペローの絶対的支配は、終焉する。エーリエルによる最後の魔法の風により全員が乗った帆船がイタリアに送り返されるとここでこの戯曲は、大団円になる。キャリバンの運命を気遣う者などいない。彼は、ひとり島に残されたのである。

第二次大戦前は、プロスペロー／キャリバン関係を、旧世界と新世界に対比させるのが一般的な理解であった。西欧人は、成熟した旧世界の文明に対し、精神的だが荒削りな米国に代表される新大陸社会のイメージをキャリバンに投影していた。<sup>(17)</sup>

しかし大戦後マノーニ (O'Manoni) は、はじめて両者を植民地の支配者と被支配者関係と読み直したのである。<sup>(18)</sup> マノーニは、マダガスカル植民地官吏の経験から、植民者／植民地被支配者の心理を分析した。彼によれば、被支配者は外来の何か新しいものに依存しようとする。しかしその期待がみたされないうちに、猛烈に反発する(たとえば、一九四七年のマダガスカル反乱)。いっぽう、植民者の心象は、幼時の夢が発展したものと考える。それはまだ人間が住んでいないスペースを独占したいという欲望に係わっている。

『テムペスト』も『ロビンソン・クルーソー』も、植民者の幼児の夢を代弁しているという。つまり、植民者は新天地で植民地被支配者を保護啓発し、被支配者は労働力を提供する。このような新しいスペースの中での相補的關係が成立した、とマノーニは結論した。マノーニに対しファノン (Frantz Fanon) は、植民者と被支配者の間には必然的出会いや相補関係はなく、植民者が一方的に被支配者を搾取したと反論した。<sup>(19)</sup> ジョセフによれば、キャリバンについては野蛮人、歴史の犠牲者あるいは上昇志向者などコンテキストによりいろいろ解釈されているが、西インド人を表象していることには変わりないという。<sup>(20)</sup>

ラミングは、マノーニやファノン同様、プロスペロー／キャリバン関係が西欧諸国による植民地主義を暗示していると解釈する。そしてキャリバンこそ、植民地支配下におかれた西インドの零細農民にほかならないとみなした。それでは自作の中でラミングは、キャ

リバン比喩をどのように使っているのか。あるいは、植民地支配者が書いたテキストをどのように読み直そうとしているのか。まず「中間航路」を直接的に示唆しているラミング後期の作品『わが同郷の人たち』<sup>(21)</sup>の検討からはじめる。

舞台は、サンクリストバルに向かう一五〇人の船員を乗せた商船リコネッサンス号の上である。レミングの諸作品で出てくるサンクリストバルは、バルバドスやトリニダードなど西インド諸島を想定したカリブ海の架空の島だ。この船を圧倒的権威で指揮しているのは、コマンドアント（スペイン語で、船長（Comandante）を意味する）である。彼は、すでに四回もサンクリストバルに渡つた経歴があり、その経験に太刀打ちし指令に反論できる者はいない。パイロットのピンテアードスを除いては。コマンドアントにとつても、このパイロットの卓越した技量なしには航海の安全が保障されないのである。

他の登場人物には個別の名前が与えられているのに対し、コマンドアントは最後まで匿名のままである。それだけ絶対者としての象徴性が高いことだろう。彼は、プロスペローであり、クルーソーであり、『白鯨』のエイハブ船長であり、あるいはそれらすべてを総合したものだ。コマンドアントには、盲目的に服従する黒人少年サーシャが付き添っている。コマンドアントは、殆ど自室に閉じこもり、めつたに甲板には現れない。彼の命令もサーシャを通じて伝えられ、士官の伝言を取り次ぐのもこの少年である。

このような舞台設定から作品の背景は、一六世紀のスペインをはじめとするヨーロッパ列強による新世界への航海時代であることは明らかだ。『テムベスト』や『クルーソー』との類似点も容易に指摘できよう。コマンドアントは、プロスペローや、クルーソーと同じく、スペースの独裁者である。コマンドアントが閉じこもる自室は、島の岩屋に相当する。そしてコマンドアントに忠実なサーシャ少年は、エリーエルかフライデイに対応するであろう。黒人少年という点では、クルーソーに従うフライデイがもっとも似ているのかもしれない。

サンクリストバルを含む西インド領有を巡って争っていた北のライムストーン国（仮想英国）と南極国（仮想スペイン）との和平条約が締結された。これを機にライムストーン国は、コマンドアントを西インドに派遣することになった。ライムストーン国では、北部のリベラルな王党派と奴隷貿易を支持する通商司法省長官が政争をしている。コマンドアントは、王党派に属する。彼は、過去の「中間航路」での殺戮や奴隷貿易を清算し、新しい植民地政策を密かに決意している。しかし、奴隷貿易による利益を求めている通商司法省や南部出身の士官たちには知らされていない。

それぞれ家族や女性問題を抱える士官たちも、遠征を契機に過去を清算したいと考えている。船名のリコネッサンス（自覚）は、コマンドアントと士官たちの新しい船出を示唆しているのである。ただ、南極国出身のパイロットは、自分の技量以外の世事には関心がない

中立者だ。

乗組員らは、日誌に業務だけでなく私事や見聞をメモしている。

仕官の一人は、邪魔になった夫人を西インドの精神病者収容所に送ったことを自白する。船大工は、捕らえられた黒人の集団が鎖に繋がれたまま海に飛び込み自殺した伝聞を書き込んだ。

あるとき、リコネツサンス号の水尾に海鷹の死体が、浮かび上がる。またあるときは大量の海鳥の群れが甲板上に激突死する。いずれもこの航海の不吉さを予感させる。あるいはこれらの現象は、植民地時代初期に絶滅した西インドの原住民を暗示しているのかもしれない。

リコネツサンス号は、目的地サンクリストバルに近い陸地に繋留したまま動かなくなった。士官たちは、奴隷も運ばず目的地にも向かわないコマンドントに初めて疑念をいだいた。実は、コマンドントは、自身を含めた士官たちの夫人を一足先にサンクリストバルで待機させ、夫婦の再会や和解を計画していたのである。しかし、士官の一人が船付牧師にした告白からコマンドントは、自分の愛人がこの士官と密通していたことがわかり、サンクリストバル行きを断念していた。裏切られたと感じた士官たちは、コマンドントを殺戮する。そして彼らも、コマンドントを守ろうとするサーシャ少年に殺害された。この惨劇の合間に一般水夫は、サンクリストバルに向かって集団逃亡してしまう。

サンクリストバルでは、夫人や愛人が夫たちの到着を待ちながら、

会話している。この作品は、「私たち女性こそ未来を開くもの。男どもは、そのことを学ばねばならない」という彼女らの言葉で結ばれている。

リコネツサンス号の航海は、ハクルートの記録に収集されたような西欧諸国による数多くの西インドへの航行をイメージ化したものである。あるいは、数世紀にわたる「中間航路」や奴隷貿易の残酷さと不条理性を告発するパロディといえようか。殺戮や奴隷貿易で権威者となったコマンドントであるが、今度は過去を改悛し再生するための航海を指揮しようとする。しかしコマンドントが過去の経歴の清算を試みたときに、自らの権威の基盤も失われたのである。アントーニオらとの和解により、プロスペローがマジック力を手放したように。状況の変化に盲目で奴隷貿易による利益しか考えない士官たちにとって、このようなコマンドントはもはや無用の長物である。

しかし、コマンドントと士官の争いは、白人植民者同士の仲間割れに過ぎない。植民地被支配者として唯ひとり乗船していた黒人のサーシャ少年は、巻き添えを食って死亡した。彼は、植民者に馴致され、反抗力を失ったキャリバンといえよう。

ハクルートの記述には、女性は一切登場しない。男たちの冒険と征服の記録だからである。ラミンクの作品でも女性ほとんど脇役にとどまっている。この作品の末尾が女性たちの言葉で締めくくられているのは、何故だろうか。男性主体の植民地時代の終焉を暗示

しているのか。この点については、さらに後で検討する。

植民者に馴致された植民地被支配者には、サーシャ少年のように植民者の本性が理解できない。だから、植民地のシステムの中に無自覚に組み込まれて、支配者に盲従している。ラミングは、『わが皮膚の城の内に』で、郷里である西インドの英領植民地バルバドスにおける人々の受動的な心象風景を描く。この小説では著者である第一人称の話者と、第三人称の語り手少年Gが登場する。無自覚な少年時代とこれを批判的に回顧する現在の著者の視点が識別されているのである。

物語は、少年Gの九歳の誕生日からはじまる。少年はPa、Maと暮らしている。暴風雨で町の一部は洪水になった。真昼からガス灯が点火された。Maと近所の主婦が、F一家の噂話をしている。母子は救出されたが、F氏は、屋根に縋り付いて流されていった。リン (Glorie Lyn) によれば、冒頭のこの逸話は旧約聖書のノアの洪水を示唆している。植民地の民衆本来の理想郷であるアフリカは、すべて洪水で失われてしまった。この島の歴史時代は、西欧の植民とともに はじまる。民話のかつ黙示録的工夫でラミングは、素朴な住民の植民地経験を語ろうとする<sup>(22)</sup>。

彼らが現在居住する植民地の権力を象徴するのは、丘の上から平地を俯瞰している巨大な地主クライトン屋敷である。コマダンント同様地主が一般庶民の前に姿を見せることはほとんどない。直接農場労働者を差配するのは、代理人や現場監督である。村は、植民者

を中心に序列化され秩序が維持されている。このような環境の中で、未来のキャリアバンであるトランパー、ボーイブルー、Gら三人の少年は、少しずつ視野を広げていく。

教育機構は、村の序列と秩序を再生産してゆく装置である。少年たちは、奴隷制に支えられた植民地の過去を無視し、ウイリアム征服王に始まる宗主国だけの歴史を小学校で学ぶ<sup>(23)</sup>。帝国に君臨しているのは、未知の遠国に住む女王である。その姿は、金貨に刻まれている。少年たちは、なぜ複数の貨幣に女王の横顔が铸造されているかが理解できない。影の女王が何人もいるのかと疑ってしまう。

女王の誕生日である祝祭日には、視察官の学校参観がある。裏では子供たちに暴力を振るうアフリカ系の校長も、視察官の前では極端に卑屈な態度を示す。植民地の序列の中で彼が抛っているのは、支配者と被支配者の間のきわめて不安定な立場なのだ。権威であるべき校長の変貌がなぜなのか、少年たちにはわからない。

少年たちは、浜辺で一人の老漁夫を眼にした。無言で作業をしている日焼けした老人には近寄りたくない威厳があった。日ごろ見慣れた集団作業に従事する村の農民にない、孤高な姿である。コインの女王と同じく、日常から隔たった存在に見えた。この老漁夫は、少年たちに権威への期待と支配への怖れが入り混じった感情を誘起した。しかし彼らは、このような気持ちを表現する言葉をまだ知らない。そこで少年Gは、浜辺で見つけた小石に自分の願望を書き込む。それは自己を客体化し、小石の中に留める行為といえる。この小石



を失ったときGは、「他人が、自分に干渉した」と思ってしまった。

やがて西インドにも世界恐慌の影響が及んでくる。一九三七年トリニダードで、経済不況から騒擾が起こった。バルバドスでも、景気が悪化する。事態を把握するため英国から西インドに派遣されたモイン委員会が、バルバドスを訪問した<sup>(24)</sup>。

小作料を支払いに屋敷に向いたMaは、はじめて地主クライトンに呼び止められる。地主は、これまでに村人の生活を守り、その責任を負ってきたのに、最近自分を無視する動きがあると話した。彼は、この島を引き払うことも考えているという。地主のほうが、村人のレベルまで降りてきたのである。

ある夜、MaはPaの長い寝言を聴く<sup>(25)</sup>。Paの寝言であるが、声はまったく別人のものである。それは、先祖の声だった。白人がアフリカの別の部族から自分たちを安く買取り、「中間航路」を経て西インドに連れてきたいきさつを、その声は語った。これは「魂の儀式」にほかならない。死者である先祖の集団が、生きている子孫に語りかけているのだ。奴隷になった先祖の魂は依然として永遠の世界に入っていない。子孫が先祖の語りを、いまだ十分聞き届けていないからである。

地元の五年級の教師Sが退職し、政治家として友愛協会を立ち上げる。Sは、島でのストライキを計画していた。彼と地主クライトンが密かに取引したという噂が流れる。靴屋と組んだSは、クライトン屋敷を含む広大な土地を手に入れようとしていた。村の序列が、

崩壊し始めた。F氏は立ち退きを迫られ、Maの死後Paは養老院に送られる。村人間でパイの取り合いが始まろうとしていた。

少年の一人が波に吞まれ、老漁夫の網で救出された。はじめて言葉を交わした三人の少年たちは、これまでの寡黙で近寄りがたいイメージと異なる親切な漁夫の素顔に触れる。彼らは、かつて村の権威の象徴であったクライトン屋敷に忍び込む。成長した少年たちの目には、屋敷も昔ほど巨大ではない。小さな村でも時代は移り、少年たちの世界も広がったのである。Gは、パブリック・スクール進学のため首都ブリッジ・タウンに移る。仲間のトルンパーは、かねての望みどおり、米国に移住した。

作品は、パブリック・スクールを卒業したGが寄宿学校の英語教師としてトリニダードに赴任するところで終わる。遊び仲間だったボーイブルーは、警官になった。米国から戻ったトルンパーは、「ネグロ」という人種意識に目覚め、ナシヨナリストとして西インドで独立運動を推進する決意を固めていた。

『わが皮膚の城の内に』は、レミングの作品のなかでも最も自伝的要素の濃い作品である。村人の殆どは、黒い肌を持っているというだけで、土地も持てないプロレタリアに甘んじている。タイトルの意味についてナイールは、この皮膚という生物学的要因で社会生活を規定された人々の内面からの視点と捉えている<sup>(26)</sup>。ただし、作品には、個人の視点や集団意識が錯綜していて、単純ではない。島の居住者のあいだにまだ統一されたアイデンティティがないことを示

唆しているのかもしれない。ラミング自身は、「自分たちの本来の居場所である城を回復すること」を意図した題名と述べている。<sup>(27)</sup>ただし、第一人称の話者ラミングが、このような視点が持てたのは、彼が英国に移住して郷里の少年時代を回顧しているからである。郷里の人々の宗主英国についての認識レベルをラミングは、「悲劇的な無邪気さ」と呼んでいる。<sup>(28)</sup>三人称で描かれた少年Gの意識は、Gが成長し言語を習得するにつれて、著者ラミングに近付いてくる。無自覚のキャリアバンたちが、植民者プロスペローを批判するキャリアバンに変身していく。英領植民地に育ったキャリアバンたちが、次に目指すのは何処か。それはキャリアバンに言葉を与えた支配者プロスペロー本来の領土、宗主国英国だった。

## 二、英国に向かう「中間航路」

トリニダードでの四年間の教師生活を切り上げたレミングは、一九五〇年英国への移住を決意した。一〇年後に発表したエッセイ『流浪の楽しみ』の中で、移住の理由を次のように述べている。<sup>(29)</sup>

—英領西インド出身の文学志望者による英国移住には、共通する理由がある。まず、読書習慣が成熟していない西インドでは、作家を支えるに十分な読者人口がない。読者の関心も、外国で評価された文学や西欧の古典にある。新進の作家は、まず読者層の中核である英米の中流階級を想定して創作しなければならない。外国で評価されてはじめて自国でも読者を得ることが

できる—

西インド出身の作家の問題は、読者だけでなく彼らが抛るべき文学的伝統や自国の古典を持たないことであろう。ラミングが自分の読書経験で挙げたのは、シェークスピア、ゲーテ、コンラッド、ハーデイ、ジード、H. G. ウェルスなど西欧の作家だった。<sup>(30)</sup>プロスペローがキャリアバンに教えたのは、言語だけである。キャリアバンは、教えられた言語を使って自分たちの古典を創生しなければならない。西インド出身の文学志望者は、初めから二重の意味で郷里追放者(in exile)といえる。出身地も文学的故郷とはいえず、異郷では根無し草的存在に過ぎないのである。

かくて、後に名をなす西インドの文学志望者が、一九五〇年前後に陸続と英国に渡った。英領ガイアナのミッテルホルザー (Edgar Mitchell, 1948)、『セルボン (前出、一九五〇)』、ジャマイカのサルキー (Andrew Salkey, 1952) やメイス (Roger Mais, 1953) など。<sup>(31)</sup>ラミングとセルボンは、偶然同じ船で渡英し生涯の友人になった。同じ一九五〇年ナイポール (前出) もオクスフォード大学に留学している。

ラミングは、バルバドスの文芸雑誌BIMを通じてミッテルホルザーと既に知己だった。両者は、トリニダード滞在中クラブを結成して文学活動を始めた。ロンドンでの彼らの文学拠点は、BBCの番組「カリブの声」(Caribbean Voices) である。西インドについての特別企画や西インド作家の作品の朗読からなり、当時カリブ地域

の情報を提供するほとんど唯一の舞台だった。直接西インドから、多数の投書が来た。この企画に関わっていれば、西インドの状況も容易に手にいれるのである。ラミングは、『流浪の楽しみ』の冒頭で「カリブの声」を、水底に閉じ込められた死者からのメッセージに喩えている。<sup>(32)</sup>

—カリブの声を通じて、われわれ聴き手は過去と対話し、未来の会話の主題を受け取る。そしてスイッチを捻るだけで、死者の忘却された秘密を聴きだす。われわれの記憶の中にある死者は、ラジオ技士によって小さなマジック・ボックスの中に喚起される。たとえプロスペローが最後に彼の書物をマジックと共  
に捨て去ったとしても、死者のメッセージを伝えるラジオの反響は後々に残る——

カリブに移住させられた祖先の魂の告解を伝えるのが自分たち文  
学者の役割であり、その声を理解し後代に残すのが現在生きている  
キャリバンたちの責務である、とラミングは述べているのである。  
ロンドンに落ち着いてから三年後ラミングは、まず西インドでの  
青春時代を舞台にした『わが皮膚の城の内に』を発表し、ついで自  
身の「中間航路」経験とロンドン生活を背景とする『移住者たち』<sup>(33)</sup>  
を刊行した。この作品は、その創作年代だけでなく主題の点でも、  
前作のつづきである。Paに代表される村人たちの変化に対する受  
身の姿勢が顕著な前作に比べ、この作品はより積極的に人々の政治  
意識を取り上げる。

第二次大戦後増大していたカリブ地域からの米国への移民は、マ  
ツカーン法 (McCarran Act, 1952) により人数が制限された。その  
ため一九五〇年代に英国への移民が急増する。<sup>(34)</sup> 西インドからの移住  
の原因のひとつは、増大する人口圧と高い失業率にあった。しかし、  
英国側の逼迫する労働力需要が、移住を促進したのである。<sup>(35)</sup>

これに先立つヨーロッパやアイルランドからの白人移民はあまり  
注目されなかったのに、西インドからの移民の急増は英国人の人種  
意識を覚醒させた。法律上は英国植民地の住民は、帝国の人民とし  
て差別することができない。彼らは、一九四八年の国籍法により英  
国植民地の住民も英国臣民 (British Subject) として自由に入国し居  
住する権利が与えられていたからである。<sup>(36)</sup> そのぶん英国人が西イン  
ド人に示す差別意識は、微妙な形をとった。<sup>(37)</sup> 西インドからの留学生  
と英国の学生との関係も単純ではない。<sup>(38)</sup>

成長したGたちの移住は、生まれ育った島国の環境から決別する  
ことである。しかし、英国に住むことは、植民地的支配から脱出す  
ることにならない。むしろ、宗主国の文化に取り込まれる可能性が  
高い。

『移住者たち』は、第一人称話者の記述で始まる。この話者は、  
著者すなわち成長したGである。彼は、トリニダードでの四年間の  
教師生活で、自由を享受していた。この国では、誕生日にはみな休  
暇が与えられる。そのため当日は、いつもより遅くベッドから起き  
上がった。ところが、彼の視野がぼやけている。窓外は日ざしにも

かかわらず、室内に霞がかかったような不快感である。この「ぼやけた映像」感覚は、陰鬱な天候の日にバルバドスで迎えた少年G九歳の誕生日の再現だった。無邪気な幼年時代との決別の日の不安感。霞でぼやけた映像は、彼の無意識にある水平線のかなたの英国である<sup>(39)</sup>。英国こそ、唯一の意味のある目的地だ。トリニダードで得られたつかのまの自由を捨てても、支配者プロスペローの国を自ら体験しなければならぬ。Gにとつての移住は、霞に包まれた英国と植民地の距離を埋める試みともいえる。

しかし、第一人称話者の語りで始まったこの作品は、次第に第三人称話者による集団意識の記述に変化している。Gの会話は、乗船者たちの雑多な会話の中に埋没していく。船の上では、西インド出身という共通項を除けば互いによそ者のかつてな会話や行動から構成されている。「ゴールデン・イメージ」号には、西インド各地——トリニダード、バルバドス、ジャマイカ、グレナダ、仏領のマルチニークとグアドループなど——の寄港地から移住者が乗船してきた。彼らの職業も、作家、元水夫、法律志望の学生、教師、秘書などさまざまである。目的地に着けば分散することになる移住者も、船上では運命共同体の意識が生まれる。英国への大量の西インド人移住を、「トロイの木馬」にたとえ、旧植民地被支配者による逆植民地化とする意見がある<sup>(40)</sup>。郷里からの離別や流浪という点では、現代の「中間航路」も三角貿易時代の「中間航路」の再現といえなくもない。彼らの移住は、植民地の状況に強いられたものといえる。

もはや植民地では我慢できない何ものかからの逃避行である。野心あるものにとつては、生れた国は何も提供してくれない。宗主国に行けば、何らかのお墨付きが貰えるかもしれない。ただし、彼らの船出は夢ばかりではない。エル・ドラドへの期待に劣らず大きな不安をみな抱えていた。船客のうちバルバドス出身の教師デイクソンはラミンゴの分身であり、その友人トリニダード出身のトルネードは、セルボンモデルとしていらしい。

ロンドンに落ち着いた仲間が出会う場所は、男性は地階の理髪店、女性は無許可で営業している地下の美容店。やがて、同郷のリリアンと結婚したトリニダード人トルネードの地下にあるアパートが、彼らの第三のたむろ場所になった。いずれも表通りから隠れた場所にある。地下に通ずる階段を降りドアを閉めれば、ロンドンや英国人から遮蔽された空間に入り込む。地下の狭苦しい理髪店は、「いわば鉄徹格子にさえぎられた刑務所」と形容される。彼らは、植民地での黒人の団結の必要性を論じている。「だが、我々には、まったく共通意識などない」とジャマイカ人が反論した。「アイルランド人やスコットランド人やイングランド人以上に、西インド人はばらばらだ」

無許可の美容院は、女性の子宮に例えられる。より隠微で、外部の英国社会から孤立し、仲間内だけしか知らないスペースである。彼女たちは、不満を口にした。みな、英国社会での立場に不安を感じている。この国の男性が気配りするのは、英国女性に限られてい

る。この社会慣行が、西インドから来た女性に脅威なのである。陰に陽にこの社会に底流にあるのは、異人種への蔑視と敵意だった。

同じ「ゴールデン・イメージ」号の移住者のなかには、同郷の人たちとの関係を絶つ人物もいる。ビス嬢は、ウナ・ソロモンと改名し、二年後には昔の仲間も見分けられないほどに変身していた。苦境を脱することができない多くの仲間の中で、ガバナーは成功者になった一人である。今や彼は、ナイトクラブの経営者であり、ホテルも所有していた。しかしガバナーは、新来の移住者とは距離をおいている。出発点に戻りたくない。過去の記憶を忘却するのが、彼の英国移住の動機だったのである。郷里に進駐してきた米兵と密通した妻が与えた屈辱を忘れ去ること。

ゴールデン・イメージ号で共同体意識を感じた人々も、英国での滞在が長引くにつれ分裂していく。もともと共通の郷土意識も希薄な集団に過ぎなかったのである。共通のアイデンティティは、むしろロンドンでも見出せなかった。<sup>(41)</sup> 小説の末尾近くで、第一人称の話者は、述懐する。

— 船の上でも、あるいはロンドンのホステルにいても、「英国」が単なる一国名でなく自体ひとつの世襲遺産の集積を表象しているということを、我々がまったく意識していなかったと言えれば、それは嘘になろう。仲間内のある者は、その遺産に敵意を示したかもしれない。だがそれは、自分たちも既にその一部に組み込まれているものへの敵意である。

当地の滞在は終わりに近づいた。英国は、我々が気分に向くままに動き回り、たまたま出会った世界だった。だが英国は、自然界のように、依然として手の届かない彼方の霞のなかに漂っていた。<sup>(42)</sup>

結局、植民地と宗主国との距離を縮めようという話者の夢は叶えられなかったのである。

一九五六年、ラミングは西インドに戻った。一五年後になって彼は、再び西インドからの英国移住者を主役とする『野イチゴの実を含んだ水』<sup>(43)</sup> を発表する。題名は、『テムペスト』第一幕第二場で初めて登場するキャリバンが述べる台詞から採られている。島の持ち主であった魔女の息子キャリバンは、漂着したプロスペローから頭をなでて大事にされ、「野イチゴの実を含んだ水」を与えられ、太陽や月の巡りを教えられる。その親切にほだされたキャリバンは、島中のあらゆる秘密を教えてしまう。結果は、プロスペローが島の支配者になるのを助けただけだった。<sup>(44)</sup> ラミングは、この作品が『テムペスト』のパロディであることを初めから明示しているのである。あるインタビューの中でラミングは、作品の意図につき次のような趣旨を述べている。<sup>(45)</sup>

— キャリバンのさまざまな側面を暗示する三人の登場途上人物が、伝聞でなく自分たちの目で現実を確かめるために、プロスペローの国に移住する—

つまりこの作品は、『移住者たち』の主題の変奏であり、深化の

試みなのである。ロンドンに集まった芸術家たちは、そこで何を経験し、いかに行動するのか。

主役の三人は、画家のティートン、音楽家ロジャー、俳優ディレクである。ティートンは、郷里サンクリストバルに妻ランダを残している。彼は、かつて郷里で小反乱に加担した経歴があり、政治意識が高い。インド系のロジャーにとつて、歴史のないサンクリストバルは郷里でなく、偶然生まれた土地以上の意味を持たない。彼と白人の妻ニコルは、ロンドン市内で別居し、それぞれ音楽活動を続けている。ディレクは、一時期オセロ役で当たりを取ったが、いまやほとんど忘れられた存在である。

ティートンは、ゴールブリテン夫人の家で既に七年間部屋を借りている。夫人の夫は、サンクリストバルで農園を経営していたが、反乱で農地を失い、二〇年前に死去していた。この設定から、夫人の夫が植民地を支配するプロスペローに、反乱者に犯された娘ミラがプロスペローの娘ミランダのアナグラムとして、それぞれ対応していることは明らかである。『テム・ベスト』では、プロスペローの娘ミランダをキャリバンが犯そうとして罰される。ティートンの妻ランダも、ミランダの第二のアナグラムといえよう。彼女が米兵に犯されたことが、ティートンの移住の動機となっている点は、『移住者たち』のガバナーの場合と似ている。

ティートンは、絵筆を取ることを止めてしまった。そろそろ英国滞在を切り上げ、サンクリストバルで独立運動を始めようと思つて

いる。しかし未亡人には、なかなか話が切り出せない。ゴールブリテン夫人が、親切で世話がゆき届いているからである。ある日、郷里の知己ユダヤ人Jがティートンを訪ねて、ランダの自殺死を伝えた。

その衝撃も覚めやらぬティートンは、酒場を抜け出しヒースの林の中にある池の畔に佇んだ。そこで彼は、池を渡る人の足音を聴く。松明を灯した行列が近づいてきた。彼は、ランダと初めて出会った郷里での「魂の儀式」の幻影を見ていたのである。ティートンもランダもまだ無垢の若者だった。むかしの儀式の記憶は、そこで行き止まる。彼は、死んだランダとの対話も和解も叶わず、彼女を永遠の世界に再生させることはできなかった。ティートンは、林の中で気を失う。

気がつくと、傍らにゴールブリテンの娘ミラがいた。彼女は、サンクリストバルに生まれた白人の子であるが、生まれた土地を離れ財産もなく家庭から疎外されたという点では、ティートンに似た境遇であつた。彼らは、共通する過去を語り合う。しかし彼らの交流は、それ以上進まなかつた。ロジャーの妻ニコルの自殺事件が起きたからである。

ニコルは、妊娠していた。彼女は、子供を熱望している。アメリカ人であるニコルは、ロンドンでは孤独だった。そのぶん彼女は、弁護士や親や郷里から孤立しているロジャーに同情的で、彼らの中を取り持とうとしていた。ニコルの支えを必要とする一方でロジ

ヤーは、生まれてくる子供が白人であることを恐れて中絶に固執する。ニコルは、ゴールブリテン夫人の庭の茂みで倒れているのが見つかった。自殺か他殺か分からない。刑事問題になるのを恐れた未亡人は、ティートンに手伝わせて、ニコルの死体を庭の片隅に埋める。そして、ティートンの帰国希望を抑えて、北のオークニー諸島にある別荘に逃避のため連れ出した。この別荘で悲劇が起こる。小型の渡船を運転し別荘を管理するフェルナンドは、未亡人の義弟で昔の愛人であり、かつミラの実父だった。彼は、かつてサンクリストバルでゴールブリテン氏に事実を告げ、農園の共同所有権を要求した。すげなく拒絶されたフェルナンドは、兄を射殺したのである。このたびも彼は、自分の領域と権利の侵害者とみなしたティートンを殺そうとした。そして未亡人の銃弾に倒れた。

この小説の最後の場面は、未亡人の死体を焼くティートンの姿である。彼が加害者とは、明記されていない。しかし、状況や小説の主題から考えると、彼以外に犯人はいないであろう。ティートンは、夫人の親切に感謝するいつぼうで、過度の世話に当惑していた。帰国を前に最後に連れて行かれた別荘は、「幽閉地」に見えたのであるのか。あるいは未亡人に性的に捉えられることへの怖れが内在していたのか。未亡人は、プロスペローの分身といえるかもしれない。強制ではないにせよ、親切の形で干渉もまた支配の一形態である。双方にこれまでの植民地意識が残っているため、究極の信頼感(47)は生まれにくい。キャリバンは、再度の隷属化を拒否したのである。

結局、英国に移住した三人の芸術家は、「野イチゴの実を含んだ水」さえ得ることなく、惨憺たる結果に終わる。プロスペローの本国に移住したキャリバンの末裔たちは、多少反抗してみても依然プロスペローの魔術から逃れることができなかった。水底に閉じ込められた過去との和解も未完に終わる。個人の自立と植民地的束縛から解放されるためには、最後は暴力しかないのか。この作品でラミングは、回答を留保したままである。

### 三、帰還と独立

一九五六年に成立したマクミラン内閣は、英領西インド植民地の非共産化と自治促進政策を推進していく。かくて一九五八年四月、ジャマイカ、トリニダード、バルバドスを含む英領一〇か国からなる西インド連邦が成立した。小国をまとめて独立させ、コモンウェルス内に組み込んで宗主国の影響を保持するというのが、カリブ地域における英国の基本政策であった。独立前夜のこの時期にラミングは、西インドの政治社会情勢を反映した長編小説を二つ書き上げている。いずれも舞台は、西インドの架空の島サンクリストバルになっている。第一の作品『年配者と無垢なる者』(48)は、タイトルが示すように、世代間の時代認識と処世の違いが主題である。より細かく作品の登場人物を区分してみると、年配者と無垢な少年に二分されるのではなく、老年者―中壮年者―未成年者の三世代が対比されている。老年世代を代表するのは、福音派牧師の妻Maである。

彼女は、宗教的偏見を持つものの、愛情深く寛容だった。植民地支配の現状を甘受し急激な変化を好まない。Maは、土着の農民精神の承継者といえよう。その生活の根本は、思想でなく勤労と生産にある。そのため革命思想に憑かれる息子シェファードを、受け容れることができなかった。

中壮年のグループは、さらに体制内改革を目指す漸進派と、速やかに独立を達成しようとする急進派に分かれている。白人の警察長官グラッベや地元エリートで立法参事会議員のアフリカ系バラベシーンは、漸進派である。いつぼう、アフリカ系シェファード、インド系シン、中国系リーら「人民の社会運動」のリーダー達は、急進派に属する。この二派の葛藤が、この作品の核心である。

以上の植民地的教育を受けて育った年配者世代に対して、急進的リーダーの子供たちの世代にあたる一〇歳代以下の少年たち、英国人ローリー、インド系シン、アフリカ系ボブ、中国系リーは、まだ殆ど宗主国による英国的教育に毒されていないという意味で、無垢(Innocence)なのである。むろん彼らは、サンクリストバルの未来を象徴している。

この作品についてラミングは、

——中間航路の経験を経て(プロスペローの国で)幻滅を味わった植民地の人々は、現状よりも将来の方向を探り始めた。そして独立運動のために帰国する。その物語りが『年配者と無垢な者と』である。この作品で読者は、植民地時代の最終局面で、

『我が皮膚の城の内に』に描かれた小世界が、社会の全領域に拡大した状況を理解するだろう——と述べている。<sup>(49)</sup>

小説の第一部は、長年英国で過ごした後サンクリストバルに帰還する人々を乗せた機中で始まる。いまや西インド人の「中間航路」も、航空機が一般化したのである。旅客の中にはアフリカ系のマークと白人の妻マルシア、英国人ビルとペネローペ夫妻の二組のカップル、マークの幼馴染のシェパードが乗り込んでいる。

サンクリストバルに肉親がいないマークは、長年の外国暮らしで郷里との繋がりを殆ど失っている。サンクリストバルへの帰属を確認するため彼は、シェファードの運動に参加する。マークは、マルシアを愛しているが、子供を望まない。マルシアは、西インドの元植民地総督の娘であるが、マークと知り合って英国の植民地政策に批判的になった。マークの祖国での中途半端な立場と優柔不断さが、マルシアを不幸に導く。ビル夫妻は、マーク夫妻と親しいが、英国人一般の西インドへの偏見から自由ではない。

第二部の初めにラミングは、山賊王への隷属を拒否したカリブ族の少年たちが集団自決する伝承に触れている。この伝承は、ヨーロッパ人のカリブ地域進出の初期に、奴隷化を潔よしとせず自死したカリブ人たちの記憶がもとになっている。第二部の主題が、植民地支配からの独立運動であることを象徴するエピソードである。

カリブ地域での地元住民による成功した革命として、古くは一七



九一年に始まったハイチ革命<sup>(50)</sup>、近年ではカストロらのキューバ革命がある。この作品の創作にあたり、これらの事例が参酌されたはずである。特に、一九五六年の初訪問で「魂の儀式」を経験して以来ラミングは、ハイチに深い関心を寄せていたのである。

サンクリストバルに落ち着いたシェファードの、独立に向けた活動が始まった。マークと違って彼の場合、長年の英国滞在の経験が独立への意志を強固にしたのである。シェファードの選挙戦でマークは、応援演説をするが、祖国で彼はそれ以上の積極的な役割を果たすことができない。マルシアが狂って後、彼は世間から隠遁してしまう。

いつぼう、「人民の社会運動」は、リーダーたちのあいだでも路線の対立があり、一枚岩ではない。リーダーの基盤であるインド系中国系、アフリカ系らエスニック間の感情問題もからんでくる。当初リベラルな政治活動は、派閥間の対立の中で尖鋭化し、暴力化していく。車への放火の巻き添えを食ってペネローペやローリーが死亡した。最後にシェファードも殺され、「人民の社会運動」は崩壊してしまった。結局、『イチゴの実を含む水』同様、キャリバンたちの宗主国での経験は、自国の独立には有効に活用されなかった。転換期の西インド社会は、政治やエスニックや個人的事情が複雑に絡み、相互に影響している。この雑然とした状況をラミングは、登場人物の会話や手記を利用して、複数の視点から描こうとした。しかし個人の自立や国家としての独立の方向性は、依然混沌として

見えてこない。わずかに、無垢の少年たちの将来に希望が託される。ただし、唯一の白人の少年ローリーは、その死により将来の活動の道が閉ざされてしまった。独立後のサンクリストバルの未来には、もはや白人は参画できないのであろうか。

独立前の植民地を描いた『年配者と無垢なる者と』に続いて、一九六〇年発表された『冒険の季節』<sup>(51)</sup>は、独立直後のサンクリストバルが舞台になっている。この時点では英領西インドでまだ独立した国はなかった。ラミングの作品は、現実を先取りする形で書かれたのである。この作品では、伝統と改革、クラス対立、自立とアイデンティティ、独立後の政治社会問題などラミングの関心事が網羅されている。

伝統を象徴するのは、例によって「魂の儀式」である。ラミングの他の作品に比べて『冒険の季節』では、この儀式の重要性が特に高い。首都から少し離れた保安林の中にあるトネルが、「魂の儀式」の舞台だ。この儀式には、スチール・ドラムが伴う<sup>(52)</sup>。ドラムのビートは、アフリカのリズムである。レミングは、ハイチの「魂の儀式」に、トリニダードの新しいスチール・ドラムを組み合わせることで、アフリカ由来の伝統に斬新な側面を付与している。

スチール・ドラムのリーダーであるポーエル、テナー・ドラムの鼓手で盲目のゴート、英国帰りの画家のチキ、森の中の老女らが、保安林社会の居住者である。ポーエルやゴートは、新共和国の支配者層に反感を持っている。保安林の居住者は、ラミングのいう「零

細農民」なのである。彼らは、単に古くからの秘儀に固執する保守的集団ではない。スチール・ドラムに代表されるように、政治の改革と新しい文化の創造性を秘めた若者を含んでいる。

保安林の居住者と対照されるのが、首都の中心「連邦通り」に住む中上流の人々である。その中には、新しく独立した共和国の副大統領レイモンド、警視総監ピゴット、ピアノ教師キャロル夫人が含まれる。フォラの母親アグネスは、娘の将来の保証のため、当時警察官であったピゴットと結婚した。夫の昇進につれ家族は、中流から上流社会に移行する。独立とともに、新しい階級社会が形成されていく。<sup>(53)</sup>しかしフォラは、アグネスの結婚が納得できず、義父に馴染むことができない。かくて、フォラの実の父親探しが始まる。それは、自己のルーツとアイデンティティを発見するための、フォラの彷徨だった。

保安林地域の労働者階級出身の画家チキは、教育を受けるため都会に出て以来、昔の仲間と疎遠になっている。しかし、保安林社会の民衆の支援でゴートがスチール・ドラムの演奏を続けていることを知り、トネルに戻る決心をした。ラミングによれば、変化している社会での芸術家の役割は社会と民衆のためにある。そのためには、来し方を振り返りルーツに戻らなければならない。かくて、それぞれのルーツを求めてチキとフォラは、「連邦通り」と決別し、保安林社会の住民になった。二人とも、現在の彼らの階級に個人的に反乱し、手持ちの特権を放棄したのである。

連邦通りの共和国政府は、陰に陽に保安林の住民に圧力を加える。ピゴット警視総監は、秘儀やドラムを禁止しようとする。政府にとって「魂の秘儀」は反乱の謀議であり、スチール・ドラムのビートは、国民を脅し安寧を脅かす響きに聞こえるのである。国有保安林を売却する政府の試みは、全住民が集めた資金で買上げることによって阻止された。

ポーエルら保安林社会の若者が新政府に反発するのは、独立への期待が裏切られたからである。外国支配は終わっても、国家を支配するのは植民地的教育を受けた一部のエリートである。彼らが植民地政府の特権をそのまま継承し、零細農民を搾取する状況は独立前と変わらない。プロスペローは植民地を去っても、彼のシステムや教育的影響は独立した共和国サンクリストバルに残る。場合によっては、後継者が以前の体制を再構築する。つまりネオ・コロニアリズムとして、植民地主義が復活する。<sup>(54)</sup>

ラミングは、『冒険の季節』第四章に挿入された「話者のノート」と称する短文で、

—私は、スカラシップを得て進学のため郷里を離れたため、ポーエルやトネルと疎遠になった。そして新しい特権に慣れ過ぎたため、これと完全に手を切ることは難しい——と述べている。このノートは、ラミング自身の反省の弁であり、独立後の社会に向けた警告といえよう。植民地経験や植民地教育を受けていない無辜の若者こそ、真の独立に寄与できる、とラミングは

考えている。その中には、フォオラのような女性も含まれる。ラミングは、『冒険の季節』で、初めて女性を主人公にする小説を書いた。この作品は、これまで男性に服属してきた女性が、その束縛からの自立を試みる。自立に向かうには、まずルーツである過去と真剣に対峙することから始めなければならない。その場所こそトネルであり、「魂の儀式」なのだ。フォオラの父親探しは、アイデンティティの追及に変わり、個人的自立への試みになる。個人の自立があつて、国家の独立への展望が見えてくるのだろう。その際、女性の果たす役割は重要である。第一章で触れた『わが同郷の人たち』の末尾の言葉「私たち女性こそ未来を開くもの。男どもは、そのことを学ばねばならない」は、フォオラの自立した姿と照応している。

## おわりに

ヨーロッパ、アフリカ、新大陸間の三角貿易は、西欧世界に豊かな農産品や鉱物資源をもたらした。大西洋をまたいだいわゆる「中間航路」は、大英帝国にとって商業革命、ついで産業革命を経て近代化を促進した重要な動脈であつた。しかし、三大陸のうち英国を含めた西ヨーロッパだけが、利潤を独占したのである。<sup>(55)</sup>工業化を進めたヨーロッパ先進国と対照的に、アフリカと西インドなどの新世界では、植民地化が進んだ。輝く「中間航路」に隠された「黒い大西洋」<sup>(56)</sup>があつた。英国奴隷制度の廃止後の一八四〇年に描かれた夕

ーナーの「奴隷船」は、「中間航路」の影の部分を見事に表象して<sup>(57)</sup>いた。航海中重篤な病気になる奴隷たちは、損害保険の対象になるため、容赦なく海中に放棄されたのである。人々の交流に寄与し文化の伝播を促進するはずの旅と航路が、奴隷の移送に使われ、現地のキャリバン化のルートになつた。

ヴィクトリア朝の英国人ブルジョアは男女を問わず、帝国の各地を広く旅をし、日記に残した。しかし旅行者らがしばしば同伴した黒人従者は、英国人の記述では無視されていた。<sup>(58)</sup>西インドへの旅行者として特に知られているのは、トロロープとフルード<sup>(59)</sup>であろう。

いずれも当時の一級の知識人である。ここでは、オクスフォード大の歴史学教授であつたフルードの西インド観を見てみよう。学者らしくフルードは、西インドの歴史や地誌を詳細に記述している。しかし、現地人の状況や英国の施策を述べるくだりになると、きわめて楽観的になる。たとえば「トリニダード人は、法の概念を持たず、裸体のままでいて、まったく幸福」<sup>(60)</sup>（四三三頁）、「インド人クリーリーは、ハッピーだ」<sup>(61)</sup>（六五五頁）、「シヨーペンハウエルも驚くほど幸福な黒人」<sup>(62)</sup>（七〇頁）などの記述が散見される。政府の施策については、英国政府はこれまで西インドに十分なことをしてきたが、現在財政的に負担になりつつあることを認め（五、一八頁）、いずれ自治政府を造り英連邦のメンバーにする必要があると述べる（三二四頁）。このような見方は、当時の政府や知識人の常識を反映しているのであろう。キャリバンに対するプロスペロー側の一方的見方は、

ほとんど変わっていないのである。植民地の歴史は、常に植民者によって書かれてきた。

ラミングは、水中に閉じ込められた死者の言葉を理解し和解し、彼らを解放するという「魂の儀式」の意味を現代的に解釈しようとする。すなわち、植民者に表立って異議申し立てができなかった植民地被支配者である零細農民の集団的意識、すなわち「物言わぬサバルタン」の声をいかに再生するかという問である。植民者による歴史を読み直し、西インド人の歴史を再構築すること、これこそ文学者ラミングが自らに課した主題だった。

ラミングは、『移民者たち』や『イチゴの実を含んだ水』で、西インド人たちの宗主国への移住や英国での生活を描く。移住者が宗主国に期待した豊かな暮らしは、彼らには与えられない。多くは最下層の生活を強いられた。プロスペローの国は、キャリバンにやさしくなかった。両者間には、依然として支配被支配の心理的後遺症が根強い。キャリバンが自立する場合は、西インドの外にはない。

『熟年者と無事なる者と』や『冒険の季節』では、独立に向かう西インドの人々が描かれている。彼らは、たしかに自立意識に目覚め始めている。いつぼうで、旧宗主英国に代わって米国の西インドへの影響力が強まっている状況も、記述されている。事実、米国の利益に反する政権は、容赦なく抹消されてしまう（たとえば、一九六二年の英領ガイアナのジャガン政権や、一九七九年のグレナダのビショップ政権<sup>(6)</sup>)。

一九六〇年代に旧英領西インドのジャマイカ、トリニダード、バルバドスが順次政治的独立を果たした。しかし新興国家が直面したのは、依然として欧米先進国の資本に支配されるネオ・コロニアリズムの状況だった。たとえ政治的独立を果たしても、経済的には米国をはじめとする先進国の資本に支配されるという状況が独立直前に書かれた上記二作で既に予見されていた。ラミングは、このネオ・コロニアリズムに対して警告しているが、具体的な処方箋を提示することができなかった。『冒険の季節』のフォラに代表されるこれまで政治から疎外されてきた女性たちや過去の植民地教育に毒されていない無事な少年たちに、独立後の未来が託されたのである。地域の経済的自立のため西インドの国々は、カリブ自由貿易地域(CARIFTA)協定を結び、これをカリブ地域共同市場(CARICOM)に発展させた。しかし、EUのように関税の自由化や人の自由な移動などが保障された纏まった経済圏は、いまだ形成されておらず、外国資本の影響力が根強い。経済的に外国から支配される限り、真の独立は成り立たない。その意味で、キャリバンの末裔たちは、いまだ完全に解放されたとはいえないのである。

#### 注

(1) George Lanning(a), *In the Castle of My Skin*, New York: McGraw-Hill, 1953.

(2) George Lanning(b), *The Pleasure of Exile*, The University of Michigan Press, 1992, originally published in 1960, p.36.

- (3) ラミンングは、彼らを「零細農民 (peasant)」と呼び、植民地の支配者に対し、西インドの土に根を植えた働き手を表した。ポストコロニアル研究でいう、もの言わぬ大衆「サブアルタン」(アーニア・ルーンバ著、吉原ゆかり訳、『ポスト・コロニアル理論入門』、松柏社、一九九八年、頁七三)と同義的に使っているようである。
- (4) George Lamming(c), "Concept of the Caribbean", in Frank Bihlsingh(ed.), *Frontiers of Caribbean Literature in English*, New York: St.Martin's Press, 1996, p.5.
- (5) Melville J.Herskovits and Francis S. Herskovits, *Trinidad Village*, New York: Alfred A.Knopf, 1947, p.321ff.
- (6) George Lamming(b), op.cit., p.9.
- (7) 坪内逍遙 訳『台風 (ナムヘスト)』、中央公論社、大正四年刊。シエクスピアの原作は、一六一一年に完成された。
- (8) Supriya Nair, *Caliban's Curse*, Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1999.
- (9) Margaret Paul Joseph, "Caliban's Double Exile", A Dissertation Submitted to the Temple University Graduate Board, in Partial Fulfillment of the Requirement for the Degree Doctor of Philosophy, 1990.
- (10) Supriya Nair, op.cit. p.35.
- (11) マンヘル・ズ・キンテーニャ (関根秀雄 訳)『随想録』(一)『新潮社文庫』昭和二十九年刊。
- (12) George Lamming(d), *Coming Coming Home, Conversations 2*, Philipsburg: House of Nehesi Publications, 2000, p.11.
- (13) Robert Fernandez Retamar, *Caliban and Other Essays*, translated by Edward Baker, Minneapolis: The University of Minnesota, 1989, p.8.
- (14) William Strachey, "True report of the wreck and redemption of Sir Thomas Gates upon and from the Bermudas", in Selwyn R. Cudjoe, *Resistance and Caribbean Literature*, Ohio University Press, 1980, p.180, Paget Henry, *Caliban's Reason*, London Routledge, 2000, pp.9 and p.15.
- (15) Richard Hakluyt, *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques, and Discoveries of English Nation (1598-60)*, vols.10 and 11, New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969, originally published in 1603-5.
- (16) Selwyn R. Cudjoe, op.cit., p.15.
- (17) Robert Fernandez Retamar, op.cit., pp.6-12.
- (18) O.Mannoni, *Prospero and Caliban*, New York: Frederic A. Praeger publishers, 1964, pp.12 and 100.
- (19) Franz Fanon, *Black Skins, White Masks*, 1952, translated from the French by Charles Lam Markmann, New York: Grove Press.
- (20) 久 共訳、『黒い皮膚 白い仮面』みすず書房、一九七〇年。
- (21) Margaret Paul Joseph, op.cit., p.2.
- (22) George Lamming(e), *Natives of My Person*, The University of Michigan Press, 1992.
- (23) Gloria Lyn, "Once Upon a Time: Some Principles of Storytelling: In the *Castle of My Skin*", in Frika Sollysh et al.(eds.), *Critical Issues in West Indian Literature*, Selected Papers from West Indian Literature Conferences 1981-1983, St.Croix, College of the Virgin Islands, 1984, pp.116 and 121.
- (24) Simon Gikandi, *Writing in Limbo--- Modernism and Caribbean Literature*, New York: Cornell University Press, 1992, pp.78-80.
- (25) S.R.Ashton and David Kilggray(eds.), *The West Indies, British Documents on the End of Empire*, 'Introduction', London: Stationary Office, 1999, 27June, pp.43-4.
- (26) George Lamming(a), op.cit., pp.9-12.
- (27) George Lamming(b), op.cit., p.83.
- (28) Supriya Nair, op.cit., p.83.
- (29) George Lamming(f), op.cit. p.228.

- (8) George Lamming(f), *Sovereignty of the Imagination—conversations 3*, House of Nehesi Publications, 2000, p.6.
- (9) George Lamming(b), op.cit., pp.23, 40 and 43-4.
- (10) Reinhard Sanders and Ian Munro(eds.), “The Making of a Writer A conversation with the West Indian Wrighter George Lamming at the University of Texas”, *Caribbean Quarterly*, 1971, Vol.17, Nos.3 & 4, pp.72-81.
- (11) Ian Munro and Reinhard Sander(eds.), *Kas-Kas, Interviews with Three Caribbean Writers in Texas*, Austin: The University of Texas, 1972, p.16.
- (12) George Lamming(b), op.cit., p.9.
- (13) George Lamming(g), *The Emigrants*, London: Allison & Busby Limited, 1980, originally published in 1954.
- (14) John Figuero, “British West Indian Immigration to Great Britain”, in *Caribbean Quarterly*, Vol.5, No.2, 1958, pp.116-120.
- (15) 富岡次郎『現代イギリスの移民労働者』明石書店、一九八八年、頁三二六。
- (16) 浜井祐三子『ヘギリスにまげるとインリナイの表裏』三三社、二〇〇四年、頁三七。なお、「英国市民」をめぐる国籍法や移民法運用の実態については、柄谷利恵子レポート、『英国市民』を定義する：帝国「コモソウエルス」現代イギリス「イギリス帝国史研究会」二〇〇五年五月一三日に詳しく。
- (17) John Rex, “The Heritage of Slavery and Social Disadvantage”, in Collin Brock(ed.), *The Caribbean in Europe, Aspects of the West Indian Experience in Britain, France and The Netherlands*, p.115.
- (18) Meryn Morris, “A West Indian Student in England”, in *Caribbean Quarterly*, Vol.8, No.4, 1962.
- (19) George Lamming(g), op.cit., pp.13-4.
- (20) Supriya Nair, op.cit., p.56; Lonie Barbara Harris, “Historical Consciousness in George Lamming’s Fiction”, A Thesis for the Master of Philosophy, Department of English Faculty of Arts and General Studies, The University of West Indies(Mona, Jamaica), 1994, p.3.
- (21) A.J. Simons da Silva, *The Luxury of Nationalist Despair*, Amsterdam: Rodopi B.V., 2000, p.67.
- (22) George Lamming(g), op.cit., pp.228-9.
- (23) George Lamming(h), *Water with Berries*, Trinidad: Longman Caribbean, 1971.
- (24) Margaret Paul Joseph, *Caliban in Exile, The Outsider in Caribbean Fiction*, New York: Greenwood Press, 1992, pp.52-3.
- (25) George Lamming(i), “Future They Must Learn”: An Interview by George Kent, in *Conversations George Lamming: Essays, Addresses, and Interviews 1953-1990*, London: Karris Press, 1992, p.97.
- (26) George Lamming(h), op.cit., p.107.
- (27) Ronald Alexander Williams, *The Third World Voices—An Analysis of the Works of Chinua Achebe, George Lamming, and V.S.Naipaul*, Publishers unknown, 1997, p.272.
- (28) George Lamming(i) *Of Age and Innocence*, London: Allison & Busby, 1958.
- (29) George Lamming(i), op.cit., p.104.
- (30) C.L.R.James, *The Black Jacobins*, New York: Random House Inc., 1963; 浜中雄『カリブからの闘争—インテリ革命と近代世界』岩波書店、二〇〇三年。
- (31) George Lamming(k), *Season of Adventure*, London: Allison & Busby, 1960.
- (32) スチール・ナムは、一九一〇年代にトリニダードで生まれた

- 器である。もとは石油の廃缶を転用したものだ。アフリカ系住民に人気があり、多くのバンドが結成されている。カリブンの唄いとともに、トリニダードのカーニバルに欠かせない。
- (23) Ian H. Munro, "George Lamming", in Daryl Cumber Dance(ed.), *Fifty Caribbean Writers*, New York: Greenwood Press, 1986, p.268.
- (24) Khalquezzaman M. Elias, "The Legacies of Prospero: A Critique of the Colonial and the Neo-Colonial Experiences in Selected Writings of Richard Wright, Chinua Achebe, and George Lamming", A Dissertation Submitted to the Faculty of the Graduate School of Arts and Science of Howard University in partial fulfillment of Doctor of Philosophy, Department of English, Washington, D.C., May 1989, p.233.
- (25) 小林和夫「ウイリアムズ・テーゼと奴隷貿易圏研究」、『パブリック・ヒストリー』第6号、大阪大学西洋史学研究所、二〇〇九年、頁一一一。
- (26) Paul Gilroy, *The Black Atlantic, Modernity and Double Consciousness*, Cambridge: Harvard University Press, 1993, pp.15-8.
- (27) John Walker, *Turner*, 千足伸行 訳、美術出版社、一九七七年、頁一一一一。
- (28) Lawrence Crossby, Cary Nelson and Paule A. Treicher(eds.), *Cultural Studies*, London: Routledge, 1992, p.106.
- (29) Anthony Trollope, *The West Indies and Spanish Main*, New York: Horper and Brothers, 1859.
- (30) James Anthony Froude, *The English in the West Indies*, London: Longman Green and Co., 1888.
- (31) Mary Chamberlain, "Consultation of Freedom: Reflections on Nationalist Hopes", in Bill Schwarz(ed.), *The Locations of George Lamming*, Oxford: Macmillan Publishers Limited, 2007, p.82.

## ENGLISH SUMMARY

**Has Caliban really been emancipated? — Lamming's trial at the reconstruction of a lost history of people in the West Indies.**

Yasuki KITAHARA

George Lamming, who was born in 1927 in Barbados, is one of the representative postcolonial writers from the West Indies, together with S. Sevon and V.S. Naipaul, both Trinidad-born, though Lamming is almost unknown to the Japanese readership, and none of his books has been translated into Japanese yet.

Lamming often cites *The Tempest* by Shakespeare as symbolic of West Indian colonialism under European powers. He assumes that the Prospero/Caliban relationship corresponds to that of the colonizer/colonized. In the meantime, Lamming considers that the traditional ceremony of the souls in Haiti metaphorically suggests the decolonization of the West Indies. To liberate the soul of the dead caught in the bottom of water in the ceremony is compared with the decolonization of the West Indies.

The present essay aims at analyzing the plus and minus of the so-called 'Middle Passage' which links the triangle trades between Europe, Africa and the West Indies, as well as Lamming's conceptions of history on colonization and decolonization, thereby approaching the essence of Lamming's works. *Key Word*: Lamming, *The Tempest* (Prospero/Caliban), Ceremony of Souls, Middle Passage, decolonization